

中山修一著作集 8

英国デザインの英国性

はじめに——著作集 8 の公開に際して

ここに公開する著作集 8 『英国デザインの英国性』は、次の三つのパートと三つの Appendix によって構成される予定です。

第一部 英国デザイン史講義

第二部 英国デザインの群像

第三部 畏友が語る英国のアートとデザイン

Appendixes

Appendix A: ‘Morris the Designer: Art, Work, and Social Order’ by Ray Watkinson.

Appendix B: ‘Black Images in Pre-Raphaelite Painting’ by Jan Marsh.

Appendix C: ‘Edward Johnston: Calligraphy and the Morris Tradition’ by Gillian Naylor.

この巻の表題にあります「英国デザインの英国性」は、ニコラウス・ペヴスナーの著書の『英国美術の英国性』（一九五六年刊）から転用したものであり、一九九六年ころのヴィクトリア・アンド・アルバート博物館／王立美術大学共同大学院デザイン史課程におけるジリアン・ネイラー客員教授の講義名称に使用されていたものでもあります。

第一部の「英国デザイン史講義」は、一九世紀の三〇年代にはじまるデザイン改革の夜明けから、二〇世紀の七〇年代に終わりを告げる近代運動の崩壊に至るまでに展開された、英国デザインの主たる思想と実践（ゴシック・リヴァイヴァル、サウス・ケンジントン・サークル、アーツ・アンド・クラフツ、アール・ヌーヴォー、モダニズム、ユース・カルチャー、そして反モダニズム）を通史として講義形式で論述するものです。おおかたの部分は、私の神戸大学在職中の「デザイン史」の講義内容に即して書かれてあります。

第一部の「英国デザイン史講義」を仮に本紀とするならば、第二部の「英国デザインの群像」は、そのなかで言及されている、英国の代表的なデザイナー、デザイン批評家、そしてデザインのプロモーターたちの実践と、そこに介在するデザイン思想についての、個別列伝となります。

第三部の「畏友が語る英国のアートとデザイン」においては、私の尊敬する友人であるレイ・ワトキンスンさん（故人）のウィリアム・モリスに関する論考（シンポジウム要録）、ジャン・マーシュさんのラファエル前派の絵画に表現された黒人のイメージに関する講演原稿、そしてジリアン・ネイラーさん（故人）のエドワード・ジョンストンについての講演原稿を全文翻訳し、紹介します。手もとに残るそれぞれのオリジナル・テキストは、Appendixes として巻末に掲載する予定です。なお、この畏友三名を含む英国の隣人たちにつきましては、著作集 12 『研究追記——記憶・回想・補遺』の第三部「わが学究人生を顧みて」の第四編「遥かなる英国の仲間たちへの謝辞」におきまして、この間の交友内容の一端を紹介しています。ご参照いただければ幸いです。

断片的ではありますが、この巻において用意しました以上の三つの歴史的観点から検討を加えることにより、英国デザインの英国性にかかわる幾つかの側面が明らかになると同

時に、ナショナル・アイデンティティーの表象としての英国デザインに関する今後の本格的な研究に向けての予備的な知見の提供が可能になるものと考えます。

完成には時間がかかるかもしれませんが、これから少しずつ書いてゆくつもりでいます。

二〇二一年六月一六日
夏のはじめの南阿蘇のわが小さき庵にて
中山修一

著者について

中山修一（なかやま・しゅういち）

1948年12月、熊本市に生まれる。熊本県立熊本高等学校時代は、新聞部にて部活を楽しむ。東京教育大学農学部林学科に入学、木材工学を専攻する。学生運動の影響でほとんど授業は行なわれず、ヨット部に所属し館山と葉山で年間一〇〇日以上の中泊生活を送る。卒業に引き続き、東京教育大学大学院教育学研究科修士課程において美術学（工芸・工業デザイン）を専修する。その後、東京教育大学は移転し筑波大学となる。

1974年4月に神戸大学教育学部の助手に採用される。それ以降、講師、助教授、教授へ昇格。主としてプロダクト・デザインの実技とデザイン史の講義を担当する。組織としての教育学部は、職を得てしばらくしたのち発達科学部に改組され、さらに現在は、国際文化学部との合併により、国際人間科学部へと改称。

在職中、学内にあっては、神戸大学附属図書館副館長を務め、学外にあっては、大阪教育大学教育学部、長崎大学教育学部、国立高岡短期大学（現在の富山大学芸術文化学部）、および静岡文化芸術大学デザイン学部等で、非常勤講師として「デザイン史」の集中講義に長年従事する。また、海外においては、1995年に、ロンドンのウィリアム・モリス協会が本部を置く〈ケルムスコット・ハウス〉にて招待講演を行ない、さらに2010年には、上海の華東理工大学美術・デザイン・メディア学部に招かれて二日間の連続講演を行なう。

他方、1987-88年にブリティッシュ・カウンシル（British Council）のフェローとして、続いて1995-96年に文部省（現在の文部科学省）の長期在外研究員として渡英し、主として王立美術大学（Royal College of Art）とヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（Victoria and Albert Museum）を利用して英国デザインの歴史研究に当たる。

1987年から2013年まで英国のデザイン史学会（Design History Society）の会員。2003-14年、ブライトン大学客員教授（Visiting Professor at the University of Brighton）。また、2008年に学術雑誌 *The Journal of Modern Craft*（Berg Publishers, Oxford）が創刊されたおりには、国際諮問委員会（International Advisory Board）の委員を務める。

2013年3月に定年により神戸大学を退職し、それ以降、阿蘇山中の庵に蟄居し、執筆活動に専念する。専門はデザイン史学。

現在、神戸大学名誉教授、博士（学術）。英国にあっては、王立芸術協会（Royal Society of Arts）の終身会員（Life Fellow）、およびウィリアム・モリス協会（William Morris Society）の終身会員（Life Member）。

訳書（共訳を含む）に、ノエル・キャリントン『英国のインダストリアル・デザイン』（晶文社、1983年）、ハワード・ヒバード『ミケランジェロ』（法政大学出版局、1986年）、ステュアート・マクドナルド『美術教育の歴史と哲学』（玉川大学出版部、1990年）、アヴリル・ブレイク編『デザイン論——ミッシャ・ブラックの世界』（法政大学出版局、1992年）、ジャン・マーシュ『ウィリアム・モリスの妻と娘』（晶文社、1993年）、およびポール・グリーンハルジュ編『デザインのモダニズム』（鹿島出版会、1997年）。